

「いのちに向かって走りきる」

テモテへの手紙二 1章15～18節

聖学院副院長・キリスト教センター所長・大学人間福祉学部チャプレン 山口 博

わたしが学生だったころのことです。ある牧師から「最近卒業信者が多くて困ったものだ」と嘆く言葉を聞いたことがあります。学生時代に教会へ通い、キリスト者になるのですが、就職し社会に出ると信仰も卒業してしまう人のことを指していたようです。「フーポン信者」という耳慣れない言葉もその時に知りました。洗礼を受けてキリスト者になったが、やがて聖書を読むのは日曜日だけになり、週日に溜まった聖書の埃をフーと吹き払い、ポンと叩いて教会に行く信仰者のことだそうです。言い得て妙ですね。わたしが自戒の意味を込めて反芻している言葉のひとつです。

学生時代に信仰を持つことは素晴らしいことです。さらに卒業してからも信仰を持ち続けることはもっと素晴らしいことであるにちがいありません。信仰を生涯持ち続けるとは、如何なる生活なのでしょう。信仰の生活とは静かな湖の表面のように、波が立たない生活だと思ったら大間違いです。色々な誘惑に会います。血みどろの闘いの生活とも言えます。今日わたく子どもに与えられました聖書の箇所はそのことをよく示しています。

テモテへの手紙二の1章15節には、「あなたも知っているように、アジア州の人々は皆、わたしから離れ去りました。その中にはフィゲロとヘルモゲネスがいます。」と書かれています。「あなた」とは若き伝道者テモテです。アジアの人々は、この手紙の差出人であるパウロから逃げ去ったことが分かります。パウロが牢獄に繋がれていたのかは定かではありません。しかし囚人の身であると16節で書かれています。今まで一緒にいた者たちがいなくなってしまった。辛くまた寂しかったらうと思います。そのような状況のなかにあつて、オネシフォロは最後まで信仰を持ち続けたのです。そして、パウロを励まし続けたのです。それは彼にとって大きな励ましになったにちがいありません。16節のはじめには、「どうか、主がオネシフォロの家族を憐れんでくださいますように。」と書かれています。推測ですが、この時、彼はすでに死んでいたのかもしれませんが。肝要なことは彼が生涯を通じて信仰の闘いを闘い抜いたことです。それなら信仰の闘いとは、いったいなんでしょうか。

コリントの信徒への手紙一 9章24節以下には、「あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。競技をする人は皆、すべてに節制します」と、競技場で走るランナーに譬えて勧められています。このことは聖書に限りません。多くの人が昔から人生をマラソンランナーに譬えてきました。話は一寸横道にそれるかもしれませんが、聖学院大学のキャンパスには、「山田宏臣記念競技場」があるのをご存知でしょうか。そこで走る学生たちの姿は凛々しく輝いています。この競技場を訪ねる度に、わたしが聖学院中学校高等学校の生徒であった頃を懐かしく思い出すのです。当時、聖学院の先輩であり、卒業生である山田宏臣氏が東京オリンピックの陸上選手として出場することに決まったのです。後

輩であるわたしたちは、横断幕を作り国立競技場へ応援に行きました。山田選手の活躍ぶりが昨日のように思い出されます。競技に打ち込む真摯な姿は感動そのものでした。彼の活躍ぶりは著書にもなったほどです。(長岡民男著『とんで、とんで天まで 十字架のジャンパー 山田宏臣物語』講談社 1982 参考まで)

しかし、聖書には続きの言葉があります。「彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。」と書かれています。キリスト者は、「朽ちない冠」「いのちの冠」に向かって走りきるのです。パウロは一寸気の弱いテモテに対して、あのオネシフォロを思い出しなさいと語っています。実際に彼はパウロを深く愛し慕っていただけでなく、多くの人々に励ましを与えた人でした。

地上の生活は死に向かって走っているようなものだと言われます。若い時はやがて訪れる死のことは露ほども考えず、「どうせ死ぬなら、今、楽しければいいじゃないか」と言いつつ享樂的な生活態度で過ごす若者も多いのではないのでしょうか。やがて壮年になり老人になると、体力も気力もなくなり、夢も希望もないと嘆く人が多くおられるのも事実です。しかし、聖書は朽ちる冠ではなく、朽ちない冠、すなわち「いのち」に向かって行きなさいと勧めるのです。あるいは天に向かって走りきることの幸いを語るのです。年齢を重ねることは、朽ち果てる人間の儚さを嘆くのではなく、いのちに向かい、日々新たになる生活とも言えるでしょう。それは「功成り名を遂げる」ことを目標にするではありません。

内村鑑三はこの世を去る時、何を残すかを考えました。彼の著書『後世への最大遺物』には、そのことが大変興味深く書かれています。大学生の皆さんには、ぜひとも死ぬまでには読んでほしい書物のひとつです。以下少々長いですが紹介して奨励を終えます。

皆さんの健闘を祈ります。

「それは何であるかならば勇ましい高尚なる生涯であると思います。これが本当の遺物ではないかと思う。他の遺物は誰にも遺すことのできる遺物ではないと思います。しかして高尚なる勇ましい生涯とは何であるかという、私がここで申すまでもなく、諸君もわれわれも前から承知している生涯であります。すなわちこの世の中はこれはけっして悪魔が支配する世の中にあらずして、神が支配する世の中であるということを信ずることである。失望の世の中にあらずして、希望の世の中であることを信ずることである。この世の中は悲嘆の世の中ではなくして、歡喜の世の中であるという考えをわれわれの生涯に実行して、その生涯を世の中への贈物としてこの世を去るということであります。……」

内村鑑三『後世への最大遺物・デンマーク国の話』岩波文庫
1946年初版発行、2011年改版発行

2014年6月26日 聖学院大学 全学礼拝